





るに好ましく白をつくるる世々の花乃  
時侯を去りはる後にもかくおのつら  
くも如く是をとりて白をつくるは種植れ  
樹の季そのよるん空もやーあいて見  
あやうく不鳴る如くはあつたわくの葉  
白猪子おうて是能のあつたあつた  
上代のあつた是後ハまれりておあつた時り



のそみ実情をのこり紀長古々集成  
撰ふよまよひ終教をたゞし學ぬあれたよ  
うとまじくせんくそめたふあふく井流れく  
梨よあさういそ歌よむうとくハナクぬ色蕉  
菫の粒白いあり一の歌ふひくくえり海へのおみ  
あさうくはくまらあめ多しこれと心風を  
あさうゆえたりえんをうらむとめよ東隣三人  
祖る一世のまをを教題よとらあゆらとら

上梓し是茂百六十遠忌の報恩ふをむと  
いふあふよ故くろ名北ふえをくくろ招執乃  
一紙をつつて小冊とくかありの追福のむを  
たゞく唯羨めくめのみすうめとら守たかふ  
まふたるくふまられる謝儀あうし相書中ふ  
まらるとあれたとく一句小筆の詞あさう  
あををあふ中しとあはあふ入るともあひく  
撰者乃とくしなることらむることあうれ



ふねえの人のかくならむ時天保十  
四年十月為彦彦の小室のゆゑに  
あつたのやうにひらきよめて  
中をよむ

凡例

- 一 賦況記のりふの句ハあつたをうけてしゆりま  
あつたのりふも二六さうしふをりふの文を  
りふも二六さうしふをりふの文をりふの  
一 賦毎のりふの時代を二一して順に奉  
元禄あはの記集の中はの記集のりふの  
せしめも裡のりふのりふのりふのりふの  
八月のりふのりふのりふのりふのりふの  
りふのりふのりふのりふのりふのりふの  
りふのりふのりふのりふのりふのりふの



撰者の誤りありあはれし。一、あるは水も心を  
用ひて再葉を加へず。一、あるは水も心を  
を其のへおまの士同し。一、あるは水も心を  
一、あるは水も心を。一、あるは水も心を。

大井川 浪うききす。あるの月  
清波や浪よらうきす。あるの月

此の國の白菊の句は。あるは水も心を  
清くきや波うらうきす。あるは水も心を  
らき。一、あるは水も心を。

詠 ころゑ横くや水のう

一、あるは水も心を。あるは水も心を。  
為 荆口のまき。あるは水も心を。  
これを載

唐使凡の入口や。あるは水も心を。  
唐使凡や。あるは水も心を。  
破凡の口。あるは水も心を。

是れ再葉せし。あるは水も心を。

牛 詠 唐の句。あるは水も心を。  
は 詠 唐の句。あるは水も心を。

一、あるは水も心を。



- 一 川のくさくさみ地ろろろく 小沢砦
- 公羽のりやう成弱とよし誤り入柔せいと  
イナよあり頼ふらる魚
- 一 京子房同名美人あはれ混 侍らわのあ  
瀬あはれくふく
- 一 山まらるを蜜柑のいらのあまをり  
こるすこく茅三のりやうをくくイ本農の  
く入りのありこくろく ぬく
- 一 よろよろく 秋んきくやこくのあ  
る良のりやうをくイ本農のりやうをく

くくくくく

先ホの教まらるくくく 後人のあま  
よあはれ後人そく 疎漏をくくくはく  
かまらるくくくくく 誤り





芭蕉翁詩句類題集

春之部

米津右近将 子録

正月

正月は月夜懐と直にや 国月

元日

元日や ありんかさひ 秋の音

歳旦

えりまき 田毎の日こそ 忘れ かくれ

年こや 猿こゝろ せしる 猿の面

立春

けしき けしき けしき けしき けしき けしき

春



61. 7. 27  
雲英末雄







齒朶

之胡威あり

餅を夢う折詰る朶のま枕

山家迎喜

蓬菜

魚子

誰ぞそ志くう餅原ふ田の年  
蓬菜うもまもや伊勢のまら使  
魚子うもやと年え牛のり玉  
湖政のせも尾まきをむしあ府言  
口を閉て歌四日

華水

子曰

大津絵の筆の付めや何佛  
子曰しふ初し甲し友しこの種

凍解

氷解

よ—野西行庵

凍をけて筆う汲何れ清水乳  
粉ひりうこるう滑と氷流は魚  
季吟勅をよを既

霞

和歌の歌うよや出せ乃い重履

あ良うし

陽炎

まふれや名もなまの山の物うき  
大日枝や—を引捨—ひさき  
枯草やまこりけうの—こ寸

伊賀新大佛寺







芥菜

熱このころ園中ニ芥子の種をまき  
けし雨やニ菜くしきる芥子種  
こんやふりふの菜くしきる芥子種  
四方くしきる芥子種くしきる芥子種  
古畑くしきる芥子種くしきる芥子種  
下せくしきる芥子種くしきる芥子種  
石川か鯉生の金身山店子我つて  
煎んとくし芥子の食煮きせし深川  
持味ききる芥子の食煮きせし深川  
五代の体わいりきくしきる芥子種

芥

玉筆

若草

春草

野老塚

菅

猫活

我しあ、新哺のころ芥子の食  
芥しきくや墨子せり焼き思ふ  
かふくしきる芥子種くしきる芥子種  
圃角扇くしきる芥子種くしきる芥子種  
前後くしきる芥子種くしきる芥子種  
木草の情きや生やきくしきる芥子種  
善提山  
山寺の芥しきく告よきくしきる芥子種  
ちき掃くしきる芥子種くしきる芥子種  
高台よりくしきる芥子種くしきる芥子種



海苔

著の先づ花さるる梅の  
老慵

塘よりいのりを表の賣しせし  
胡ららひや巻る浪者一の砂  
海苔をみるは海苔

乃り汁のふきハスセる海苔  
この梅は生るる喜と啼つへ  
右のころめや難波の二年枝

梅

ころめやきくおちる白糸を  
さくさく梅はまきく引んもりぬ

竹内一枝杆 ころめ

世よりする梅は一枝乃りまきい  
あまの子の石を新作りしはまよふ  
すまはし道表らむのこのひより  
居るは地植の梅はまきくを是を  
あまのこはらぬのこの隣の梅  
まよふはまよふはまよふはまよふ  
まよふはまよふはまよふはまよふ







一とせ考のせつう旅蘇せう一以きそ  
い脚の俣よ知人うきう侍ううこの  
まらものおくらうけりそそ我を尾  
を訪り北へ

又いそへ蘇のわーそいそう兜の花  
子良鞍のうらふ木ありとすま

伊子良子の一りとゆーすめのそ  
細代氏初々息うきこ

梅の木うりけやう木や梅の花  
里のふよしあわのこを牛一り鞍

園めいさう

暖簾の奥との中一山乃うら  
まきしやうーまきこのふ月と梅  
人いんぬまや鏡乃うらうのうめ

吉来のほなまきこのうらあまきまを  
薬弱のそーとれもそーすまをのむ

何し新八吉吉の二月がまうー  
雨具のほな父梅九子のうらほを引

うらあまむーの一字あつたあり  
梅うきうのつとまの出る山路りれ



柳

あやうきや面こきまゝ柳へ  
餅をききし糸とをくやめきふ  
在原寺

言を認りて眠る嬉やまを  
採雖りて對して

そらくの心初りてすまへ

古川へてこきまゝ葉を法柳へ  
吹度山塚の石を白くあまふ

笠の緒りやめきこころの旅出れ

燈社園

笠の緒りやめきこころの旅出れ

膝まのり柳のさつるまを  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

こころの雨にととくし降りて  
こころの雨にととくし降りて

椿



春の駒  
猫の意

遊水やほらきあふり竹の葉  
さる里の瓦えまうぬまの駒  
移このあゝ寛の萌よりひまわり  
まふとふか大さつけて猫の意

田家

麦めしふやも恋ねと乃妻  
福のよゝちやむ時固乃おなる月  
岸よりまゝる白魚やとらぬぬへま  
あけたりや白くをまらまら一寸  
為陸下向し口をせぬ送るのふ

白魚

船のふりしとあはるやれりぬ

規子漢

七つら魚や運き目をあははの網

膜所りりくおして

猫のまらりりくおして

相國寺

鶯

うももはよ感ある竹のちや  
鶯や柳のうらり花乃前  
うももはよ感ある竹のちや  
ちうももはよ感ある竹のちや

千代



原中やまのまつるん啼き

猶啼

ひるまより上りやまの山味ん

杉風夢魚

二月

きけりるま二月中旬よりか子

二月廿七日神法山を出よ

裸のまきまのまきまのまきまのまきま

枕月

花のたよりまはるるまのまのまのま

名所の體のま

貝寄風

貝よまの風のまのまのまのまのま

方吉のまのまのまのまのまのま

醫門のまのまのまのまのま

初午

まのまのまのまのまのまのまのま

彼岸

まのまのまのまのまのまのまのま

伊勢のま

涅槃會

神壇やまのまのまのまのまのま

二月廿

水取

水取りのまのまのまのまのまのま

枯花

まつまのまのまのまのまのまのま

初花

まつまのまのまのまのまのまのま



初撰

伊賀上郷之茶師寺初會

紅梅  
梅種  
種苜  
種芋  
苦花

けつさくし折ししりふいよきりあり  
頃より桃の中よりよりしりふいよ  
類し似ぬ数りし出よ初をえり  
紅梅や忍ぬ恋つらる玉よしり  
於よりありし梨のつらる白や山を  
この種と折らむこあきし唐りし  
きわいしや花のきりしふきあり  
よきりしきりしりしりしりしりし  
はあしりしりしりしりしりしりし

葎生

葎生りり葉やきりや破れ家

逢龍尚舎

萩若葉

その名を先とふ萩のりりしり

李下をを我を館

燕

昔燕しりしり先ふらむし萩の二葉  
煤りしり埃替りしりしりしり

捕家

きりしり泥ふ落しりしりしり

名ふハ龍のりりしり

雉子

疾石りしりしりしりしりしり



言部

父母の七さうりふ意しあし  
て雀啼巾の拍子や籠のこゑ  
蛇とくすハおららー蛇の聲

道世の時

雀子 雁の活るん  
鳥巢 隣廣の傳多波旅る趣れを  
蛙 古池やこゑらつ花こゑ水の音

蝶

蝶子ハ目こらう 籠を啼き音可申

莊子画讃

りららーの何は同人とふ地蝶  
怒誰と常しやうらうらうの蝶  
こゑららーと此ハ

夫やてふ我や莊子の夢こら  
こゑらやふらまぬまらと音こゑ  
こゑの音こららー那巾の口影ハ  
下木亭

蝶の約乃 幾度こゑらつ蜻蛉の音



田螺

親よ、川の友よ、世を共にせよ、  
袖よ、川よ、田中の塔の像をたて  
芳野をたつ村

雛

飯具や雨ふるとも、  
内裡ひそかに、  
心よ、まはれの、  
尾を知らぬ人、  
あまを、  
子の石も、

重三

湖子

子餅  
峯八

伏見西岸寺

青柳の泥よ、  
子座は、  
あのを、  
うひ、  
我衣、  
あつ、  
あつ、  
あつ、

桃



梅

古き梅より来少む男うれ  
舟あしえやまむ時あり漢の梅  
遊人

命やふ中よ活るまじくふ

探丸子別野

さしゆのさしゆありあはれ梅うれ

乾坤を任

ゆきゆきとくさくさくをさく梅  
高しよふハ歌えんそのをさくさくをさく

山家

山梅

鶴の巣ハ花の外乃きさくさく  
扇目しほさくさくやあはれ  
木のこきさくさく汁し給も梅うれ

美香別野

香こやまきさくさく肥まきさくの差

春の歌ハ梅うれ時ては并々め

雨うれ梅ハ

子後の歌ハ梅うれ時うれ山さくさく

初濃きさくさくをさくさく

うれさくさくやまきさくさく梅のやまきさく







秋通に陸奥より極々時

そまきくまきよのちかきくまきよ

玄席子深川の旅舎を訪

花乃くいとまみ舟をく物系

上那の花をよすく物よん幕

うらそりま物のきふくこのあきき

ありふくかきくらの松をよこのき

四つ五若のうらうらぬきもくくう

畏ゆつまの花をうら四五天の茶末

も是よはいく嬉しくまふま下

何れもくく由昭信正のほききいとい

花原山よりくく花のま松子朝の

林まききかりひくくあはあり

花の雲

親者の薨死をやりつて花乃くえ

花乃くえ

くれのく鐘ハ上野の流きよ

僧寺吟詠別

朝の毛乃くろき衣や花のく母

先かや直竹く尺ハくくく

花の雲



花

上野乃興

花は種々の織を以て乃三氏女

夏方知酒を多し始覚精神

とありし浮き我は七云く食年

うち山や外様し人の志きり

堀堀し出よ浮世及びさひり鳥

知も水花し其まう高平鞍

交ちりその口をまうこれの心

花の心をまう其の望れ侍り

是し明ぬをまきや我の歌言

もる風し以出し笑ふ花しりれ

きりし也夢もそらうまは師ありあ

さしりさうる花の心を伴すしり

御水眺望

幸い海乃花は花すし脱りさう

訪山隠

檀の木乃花しりし夢の奴もさう

志嘆し七日朝のうすもとりれ

物皆自得

花しりし也し蛇を喰ひり友まあ



あまの槍さやぬの志本のいつる  
有きのふハ夢とこそし雲ハもよみ  
只は夢一掃のふみハのふかあまふと  
ささくし〜〜〜終ふ賢者の漢をうけ  
まひ せや花のあふり此あまをささ  
瓢箪は膝をいれし旅のおとこ  
いとあう〜〜〜

花をささくしけりや二十日の

瓢箪は膝より旅をささく

この瓢箪をささくしけりや二十日の

古香や花の抽出乃 珍むもき

龍門ニウ

龍門のさや上戸のおとこせん  
海のささくし語らんか白龍の花

す〜〜〜

これささくし山ハ日ららの朝日さけ  
ささくしハさのよささる月夜りれ

ささくし村ささくし

花のささくし謡〜〜〜似し旅床六  
昔城の文字とをささくし四方の夜を



神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
敷き置ける神のハカ成りていふ神  
いふ神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて  
神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて

神のハカ成りていふ神のハカ成りて



酒造業記

四才より三才吹ひ水し酒の酒  
それの片に飲し一の酒を丸丸

尚山

花の夕之所の丸丸ハ大遊園

支考陸奥へ下るを記す

はくしん推せよ丸丸一五三二

尾張のつんずく流は一橋本等の酒造

茶一種おろしを人々よむとす

飲明て丸流し七并二外橋

西行傳

よきよけりおはなきことのとれり

とし五重の障り口を

あむくらしあれまの障り口を

示門人

あう能とや人々をそそむる

南山の雲を採雪を舞一巻の障

ちんをやあつらふとる琴乃塵

よる流しを

西行の廣えあしん丸の巻



茶拵

躑躅

根をたると痛みあり世ぬきつ茶  
煎ぬきしものもぬきしもの

茶しり煎ぬきしものもぬきしもの  
坦堂お茶を侍

北へ倒さ振るしもの花の別れ  
孤石のころのころのころ

むら起しし隣りの茶をみるは  
拵りしや茶をみるしもの秋も起して

茶店

つ——活しきりけふ子鶴裂る女

あはれ

裾山や吐あとの夕ほり

大和り脚の時丹波市とやふふ  
ころころのころのころふふの光来  
かきつるころのころ

藤

昔外て宿りしころやふふの光  
那波のや岸寺佛頂神師の  
小庵をみるころのころ

山吹

山吹のや茶茶のころのころ教を  
ふふのころのころのころ



西河

日くくとやまのちまの腕の音

画讚

中少老や字法の懐懐のるふ時  
や乃以や笠をうきんく又枝乃形  
そハ賦の目くしんかたり思あそこ  
山詠来下何や中一 一 一 一 一 一 一

悼呂丸

昔仰よりあはれハ塚のすこきき  
田家うまの筆を伝

蕪 蕪

春の音

行春

八木の鐘のきこるんはまのふれ  
鐘つらぬ里ハ何をうま乃くき  
ゆくまふ和歌のこころまこはけり  
留別

行もや鳥啼 魚の目を返  
望湖水惜春

春雜

けりまををこはのんかきをくま  
杉柳 さうりあふく女ノ柳  
乙女東武り飾り  
うめも菜糰子の宿のこころけ



のまゝ 来ぬ 庭 敷く 乃 ころ 柳  
初瀬 ころ ころ  
まの お や 籠り 人 ゆ ころ ころ 巻の 隅  
ころ ころ 湖の 巻 ころ 浦の 巻

夏之部

四月  
更衣  
短衣  
灌佛

昔の ころ ころ 木 ころ や 四月の ころ ころ ころ  
ころ ころ 服 ころ ころ ころ ころ ころ ころ  
ころ ころ ころ や 短衣の ころ ころ 耳 ころ ころ  
灌佛 や 敷 ころ ころ ころ 珠 ころ ころ ころ

灌佛の ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

尾 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

何 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

枕 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

牡丹



杜若

言ふぬ家や日入の花乃密  
のまらもいほくや作る水の舟  
くも三河あしとま麦ののちを  
大坂まき

あきらつては語る旅のひらり  
の崎の宗澄屋敷よりし道街の  
宗澄のまきをいふまきをいふ  
おのころを思ひ出さるのちよふ  
あつたまきをいふおまきをいふ  
あつたまき

粟粟

杜若我れ一麦りのおひあ  
白り一や時雨の花の咲つて  
強杜若

白帯一ふねをいふおのころ  
浪磨

海士の類まらつていふおのころ  
名もいふおのころ

秋や浪磨にや秋をいふ麦日和  
名もいふおのころ

いそがしき一穂麦をいふおのころ

麦



甲斐より

り約の麦よりあまじやうり  
ひきの種や涙よりあまじやうり  
五月十一日武府を出てあまじやうり  
人々川崎よりあまじやうり  
り約よりあまじやうり  
麦の種をよすよりあまじやうり  
招提寺  
り約よりあまじやうり  
日光山

あまじやうり

あまじやうり

日光山

木下園

日光山  
招提寺

夏木立

木下園  
招提寺

日光山

日光山

日光山

茂

日光山



山藪の——や凡の筋

首柿舎

初の花

抽の——若きまの料理の同

悼大願和尚

梅 忘るうのこれおむち——

と角の母五七の追善

卯のちん母ふき——宿を——

うのふやうの柳の及こ——

渡河の園——入て

盧揚

——海や 花うらまれの茶のぬ

菖菘

二葉軒

中つ——門はむ——のま葉うん

園の住ま守の——大垣の旅舎を

訪ま病り——小のねる——りみま

いふたんま——宗祇の昔うにむ

うちのまは仇はませし花のあと

汗六の木を海に抱く——時二日のうら

椎花

椎の花の心する似よ木をの旅

小督境ま

筍

うき——やなけのことをもく人の果



鯉

鮎  
杜鰩

けのこや稚き頃の繪のまを  
 まく城ん少老の中 山まらうらを  
 うら城うらうらまを人き碑まを  
 福余をまをい出らうらうら城  
 ありあう新のうらまをい  
 けうとまをけういまをい  
 一人の穂菜山の木まを席を  
 ままけまをあけ  
 又たういあうの川のあゆ繪  
 まけやまけ耳のまをうらまを

けうまを、まの佛諸師まをい  
 けまを丸油月夜のまをまを  
 石のけうまを若れまをい  
 星夜まをうらまをい  
 まけまをけうまをい  
 清まをうらまをい  
 子規正月まをい  
 けうまをい  
 けうまをい  
 揚や一つの聖中まをい



鉄蓋の蓋 雲の白

浪磨の誓乃 先は啼や子規  
あゝまゝに消り方や啼き  
津の啼くは死す、さうの何

素見の詠

甲やまゝうしん人の流乃うしん春  
さうのく一見の葉の白行 又那流  
の志のこゝを尋て教皇素見人と  
いふは信ちとて雨さう出れは先  
は素見うしんやうしん

若草やうしん人の若の詠

那浪野

雪を横うしんひきひけよ子規

六十一周忌 翠の母り

ほやうしん浪峰 高や古き祝箱  
子規 邦の横うしんや水のうしん  
来うしんも来うしんやあゝまゝに

浪城

何うしん浪大竹 最をもる月夜  
杜うしんもひうしん麦のひうしん尾花



何れもすん啼や五尺のあやま

き——早あ——る

きう——え早や我らんあま

仙臺より

田や麦や中よりあまら子規

夏夜僧

んくまわれ出まのほらま

あまのやすき節もす神

木もれす茶摘んやあ親

鳥賊賣のあまらまら——は子

閑子書  
行子

うき我をまひりくせまのんこ書  
能なるの福も——我をり子

四つんあまら——保川の尾を  
まらまら

老當

うらまらや竹の子数み老を啼

鶺鴒舟もあまらるる物

鶺鴒

おれららるるやうやま鶺鴒舟

まらるる子のあまらまらるる

別舊友

鹿袋角

二まらるるやれらるるの角



蝮 蟻

誠は唐明皇のころの事かと思ふ  
何れいふは源氏のありきか  
中々今ハ中々の中は  
さういふ人の世の業も  
は六木を移すなりむく時  
うきく乃極るかきく  
杖を地をむきく  
我者ハ故のちひまを  
清風なり

螢

さか出よ烟屋下のひまのころ  
屋カレも昔あきり  
さかすさささささ  
木を海の旅あり  
さかすさささ  
このころは田毎の月  
その昔もさかすさ  
上林こころ  
けいさや船以碑  
おの火を木ころ







中なるまき

五月日の降 殊にさや光堂  
まきまきふ集めて一川一川  
日乃さや光堂のまき五月雨

落神金銀破

五月日のやま紙魚きこも燈の泣  
はまを社や春鳥のまき葉の畑

高川の中流

まきまきく燈のまきまきまき  
五月のまきまきまきまき大井川

水出ゆるり北はどろり水はく端向ふ  
逢節すまきまき竹まきまき人のまき  
ありまきまきのまき

五月日のまきまきまき大井川

まきまきまきまきまきまき  
まきのまきまきまきまき

栞雨

まきまきまきまきまきまき  
栞雨やまきまきまき栞雨のまき  
信濃のまき  
入栞まきのまきまき一雨やまきまき



野宮寺日記

穢

糎

糎

菖蒲

夏小太刀も五月よのき北城のあり

ちりやゆ小片もよまをむおね

まききーヤ子餅の穂う出つらん

あやあまう軒乃鰯の弱糎

百列

何ぞめそちーに結らんまの糎の結

何士よのまをり少く五月四日七言求言

をりるよまや死をもすりて

菖蒲

花あや一穂一穂一穂一穂一穂

若野

田植

田一枚うらうらまきる柳中丸

陸奥の名ふく心うけりしあそ

すら同屋の辺あつーまきる

あまきよーうらうらうら川もーね

お岩お岩一列して下まきる等形

子の芽花を敷くのが実をさして

あふくきよーうらうら

ゆ家のまーめや奥の四うらうら

尾花の落交り一葉



サを旅し代々山崎のりりせり

飛田氏のこころ

紫つけ——ののこころや田舎屋

賦水ニ

雨そりく昔よりなまの早苗

夏あとの白川ふ出ニ

西の東のまの早苗よも川のさる

早苗も我色とくらき口敷の南

まのふの初とすの里とやよま摺の

名残とくし方ニ

紅の花

はるハ昔女の初ひよ存とすうそ  
西の文字ありともや山崎のりり  
故の恋よませし言とくよあり今  
ぬるふ地とるの面ハ下まふ成れ  
ませし初とすの里とやよま摺の  
す昔おのこころなまの早苗ハ  
不意とるまのこころやむ——志の摺  
清風ニ

り末を誰か肌かれんへたのこ  
看柳を折りけり



装束の時

鐵線花

あまらねの里に花の鉄線花

子珊の事

紫陽花

あまらねの里に花の紫陽花

百合花

あまらねの里に花の百合花

聖花

あまらねの里に花の聖花

正成の像

鐵肝石心は人の情

あまらねの里に花の鐵肝石心は人の情

瓜の花

あまらねの里に花の瓜の花

幻住庵の母の事

あまらねの里に花の幻住庵の母の事

重行の事

茄子

あまらねの里に花の茄子

あまらねの里に花の



昔き中しきまきまをいふあまひ汁

こるこり

藜

中しきまきまの藜の杖うきまき

木田の竹碎

竹梢

降しはるる竹のうきまきハミのとま

菜の花

うきまきの菜の花をまき蝶のせせり

訪はる者

栗の花

さの人乃乃からけぬ花や軒のうき

標の系

うきまきうきまきうきまき

合歡花

系酒やうきまき西施のゆきのうき

李

まのうきまき竹笠被てるあま

白川は住何りふきをうきまきうきに

水鏡

関守のうきまき水鏡うきまき

大津波仙

うきの若く水鏡うきまきぬ花うき

高河うきまきうきまきうきまき

うきまきうきまきうきまき

うきまきうきまきうきまき

水鏡の菓

関のうきまきうきまきうきまき



六月

六月や峯——やあぐ尾山

そらおききりやまろくまらあや  
杉風の採茶尾——

水月

香の河豚左膳 水月月の鯉

水月月の腹病やまの若の節  
水月月や鯛——あはる——白鯨

ふ子のあまうり——あまの園  
よりまきまき——ゆるり

土用干

土用干——ちまき人の小袖丸いまや土用干

暑

暑——蛤の口——あきなるあきり

あけももまはふい——あ上川

新庄風流

氷室

氷のおく氷室たらぬる柳——

出相月山

やの峯

やの峯——くろのく保い——つ崩——月のや

あまのま——あまのま——あまのま  
あまのまを梅——あまのま

あまのま——あまのま——あまのま

あまのま——あまのま——あまのま

凡蒸

凡蒸——あまのま——あまのま



涼

游力多

漣やゆのささりの相ひかり

お里山より

あつたや雲かこみくぬ南の

小倉山院

松林を回れそやゆのささる草

石川丈山像

ゆのささるぬ織ハ襟もつらま

宿押よとらもさのくみささる

四鉢ルるのささる園の音涼み

信り人のあつたささる草生

一帯ささるぬ織を訪ふ

ふつらさる君あつたささるゆ

文解子出山の像を贈るゆ

南も佛ささるの素ルよささる

小松の中一ゆ

いのちをささるゆのささるのト

杉木のささる葉々水の音ささる

ささるささるの影や弱るゆささるみ

風瀑綴列



ワキハルハ不意の中一山をこころみ

十ハ橋記あり暇を

はあつた目より心ゆくその皆凍

法外より

とく——を我若みして福を也

とく——や何の三月のお置山

袖の浦眺望

あらう山や吹くうらなみしゆふまをこ

汐残や朝暈わゆる海涼

花のこころこころとよき結びをたまき橋

もいすの柑満寺の志り入はあて

影浪をいそもも少晴も涼引ハ

ツをまきヤ橋より涼山浪の花

小朝とよき柳も——や海さう軒

四条の河原の物縁とて夕月影の

はよりを眺むるうらまき川中一ふ

床をきくしておをくう河のちぢ

とくおふ女に帯の結めいらぬ——男

ハおおきうとよき寺では師老をい

申うら梅屋被浪をのて——こまを



いさかほる類りの

都のなまき

川風や為柿

曲翠さよの遊

飯あふくか

川中の根木

聖水新屯

とさ指図

涼一

東武より

東海の毛腸

聖明

とさ

とさ

政

城

那

湯

湯

清水



汗

むきふしうしちやあまひく志らぬ  
汗水やうし那さやうし乃り夏山伏  
光明寺より

あせの香より衣あまらし行者堂

晋の洗心をうしやせ

簞

高きうしうし高き森の香やうし  
舞高うしうし向の像

その中一ひうしうしうしうし

そむよそそそ丸い雲の袖より

園

うらなうしうしあうしうしうし

那のうし

心太

清波の水汲よせり心太

ふたの舟遊書

道明寺

水むけうしあうしうしうし

本居まうしうしうし招水

家名を稱うしうしうし

蓮

けその葉ふ目をうしうしうし

枝をうてせうしうしうし

ひうしうしうしうしうし

まのうしうしうし

登



顔

むらさきのこゝろに眠るに身をこころ  
子供およそ春のわかさをね瓜切のん  
平田幸由は(又のきき伝下)  
ひるまのこゝろに寝せしもの床の  
夕のわらうんもさや身丸らうむえ  
ゆわのゆのるゝおのた祭は紙物さ  
ゆふぢや酔て顔出れ言の穴  
夕顔の干瓢むしこおむらり  
まらるゝこゝろ上の鏡の腸  
甲斐山中

水葱

首尾

は 野の 颯 閉るむらさきの形  
首尾何りのまのよふ酔て  
穂葉の松の下涼くもき道の松  
たのきむほり

瓜

山うけや身を長そんうけはけ  
吉来のあま

吉来瓜

初春うすくねく涼く瓜の泥  
うらの皮むしこころや葉巻  
周の夜下拵下も玉吉来  
ころ吉来たそまや日くん痛やせん



柳新木子片花の涼——らるる葉

之道う對して

散紅葉

譯

我う似るやろふ不割——紅葉うり  
清籠や波うちりうこむ青紅葉  
指すりあさうらう落るうせむのうら  
杉凡生衣いと清くうう調て  
おろろれと

いとや我よきまぬ忌うう障るる丸

紅葉山

撞鐘丸びくくやうをうせむのうら

五石寺

きつらきやううて入せむのうら

廿六(丑末)

秋死ぬら——きハスうら障の新

の石控ゆ

夏の月

蛸毒やううなまう夢ををらうの月

子を打も研うのうら友乃月

をらうの月清油より出う赤坂や

大津木常こすうら

秋ち起心のよるや四冬や

秋近き



夏雜

武隈の松より

楳より松をみよ木を二月に

かき

辨きまへえ紙衣のぬをりあは

まねまやまきひらきけくまねお

甲斐の物内とくまふとくま中

の苦吟

るはく我を繪り見よまらぬか

帰庵

ちろころもいまこ風をとくつとさく

を山やまらのるの船くく

杉山や葉一とくまの雨

ちろ山や杉くく日の一里鐘

まねまも只ひら葉のぬをりあ

月をくくもあくくや浪盛のま

高杉のゆ一雅きそのをくくま

くくま悼く

そらきくくくもくくまらぬか

手巻の流

まねくくく流くくまらぬか



那波の光のちりり

夏ゆりしは波をねむる逢れ  
なる山や紙渡りし合対分  
練つ男ふ人を志をうの夏物に

救世石

石の香やなること赤くはるる

松崎

鳥こやふこくし碎れたるの海  
松一まやるを衣裳の水と月  
林野のりの佳景あり

山小海えうつき刀やまを

尿前山家

零風さるの尿さるまうらそと

高館ま

ちうらまや兵としろ夢のあと

井持氏也橋

せのまや御ねうらう浪のう

曲聖のうらま

夏のおや崩き信めり冷たの  
なるの波やこころのうら下波の書



桐麻畑 とうきやあ〜のま〜麻  
木白（うき）

秋の節

直江屋（うらやま）

文月

文月や 夕夕え 夕夕の夜よそ似ん

今朝の秋

けしやまら 猶うらささうらささの秋

馬海地望

初秋

もろ秋や 海え 喜田乃 一ととあ

来秋

初秋や 夕夕え 夕夕の夜よそ似ん

秋来まらう 耳をたつひて 枕の角  
あま来ぬとあを 夕夕や 葉の皮  
夕夕や 夕夕のまを 秋の来ぬ

大



残暑

牛初産し、牧のこゝろをよま、残暑を

粟津の庵に、残暑の心を

冷

ひやくと、残暑をよま、てひよと、残暑

は旦の夜をよま、てひよと、残暑

身又

暁をよま、てひよと、残暑

雲の季下

穂妻

いふつと、残暑をよま、てひよと、残暑

宿敷殿

あのを、ハ、穂妻、あを、よま、てひよと、残暑

或切、穂妻の、日、よま、てひよと、残暑

と、や、い、と、よま、てひよと、残暑

い、あ、つ、と、よま、てひよと、残暑

粟津の季下

い、ま、つ、と、よま、てひよと、残暑

本、百、と、よま、てひよと、残暑

と、よま、てひよと、残暑

粟津の季下

と、よま、てひよと、残暑

粟津の季下

粟津の季下



七夕

いれはるかや萩のささりすき穂  
縮つやや言乃ささりる位の高  
月弓や塔の一松男たあま  
もまのこのあぬささりや雨中  
何のさげに言乃て四圍趣く人  
言かばさやささり視乃にハハ旅  
七夕や秋をささりむし何一免の秋  
名おハ観乃ささり

星合

何言の巾やたさん就田川  
合秋の木の数おささり

素あまの母七十あるりやと  
七もよとささりささりささり  
をもて歌をささりささり若七人は  
結縁はなれてあま七更の歌をささり  
七株のさ萩乃ささり本や何の秋

吊両岸

言水ささり早も旅宿や岩のさ  
水ささりものささりささりささり川  
出ささりささり  
蒼波や佐渡ささりささりささり河

銀河



祝洗

よし野を西りし尾

祝あらし切道ハけしうしけは流

骸骨の漢

盆

夕月や盆批打え物と糸丸

甲戌の秋大津うき入り城ありこ  
の海より諸島せしれと進ハ舊平家  
仰しそ盆會を嘗とそし

墓祭

家ハいふ秋う白旗のけりまわ

魂祭

舟道也や折しそそまきしるしつり

か賀の國なるる

並坂のゆいしやみつらるる

多部山

たごつうそい焼場のきり丸

尾妻のうら方まうりそとやう

敷をうぬ方とふ思ひそるまうり

舟重の四圍りし時

言古

旅しし寸二る十のし船支度

丸置の石籠ちを出入り付金環の  
ハ枝やうれりし

高置

このあてしるむまきくおり船











石山の石よりきりり——あまの風

路桃天号

柳の木のかの葉ちりり秋のそ

中村をさそ

あまの川伊勢の葉系於凍

秋の風吹ともきりり——栗乃穂

望右之銘

人の聲をきくをれりり説き

袖のしるきむ——あまの乃り

昔秋のたききを

秋風や相り勢りり——あまのり

伊勢記りの説

西ひりり——あつれを同——秋の風

懐松名嵐葉

秋のうをれりり外す葉の枝

聖水の旅行をさす

又さうのうりりやま——秋の風

柳陰軒より

あやれきりりりりりりりりりり

金鳥寺より

散柳



木槿

庭挿て出さやちうらうら柳  
花本槿けしうきさのうき

三上の穴

さうこの木槿はさうらうきさう

桐一葉

よふをいつ一葉う虫の梅孫て

嵐雲うおん

まふさうてふれぬ相ひさ

常麻寺ま

朝顔

僧あさるい久死のうる世の松  
朝顔のまう啼けぬ乃よ

和具角葉書り

あさうら我れうらふ男う那

嵐書者う横のうらうら

朝顔は下家のぬさあつれなり

人々都あう送して二重城似結ふ

何さういふ酒さうらぬさうら

田園

あさうらやあさうら鏡あつれつ

朝顔やうきさう又我友をうら

蘭

有 蘭 草 菊 宜 心



敷賀寺茶院

門より入らば種決りしらにのりか  
悦堂和尚の庭言りしおれり  
魚を以て茶情茶のやきりしん

茶店より

葉の香や蝶のつらきこめす  
秋海棠西風のしらすいほり  
玉川のぬるいおるれりぬれり  
むまろくことおるれりやをれり  
瓢のぬ

秋海棠  
女郎夜

米のなき時を瓢ををりし

巻讀

芭蕉

朝帯や玉の聲にをりし

茅舎の感

はせををりし  
此寺ををりし  
萩の香りこや秋風のころり  
痛しき萩や雪散せし花のこ  
なき原や一夜ハヤをりし  
ひら家よりおるも萩をりし

萩 萩







芋花

高田啓師 細川喜之庵より

菜園のいつきの花を芋まきし  
芋いふは秋のつきのまきし  
仲秋中のつきは芋まきし  
の秋をる

瓢

夕ふや秋はいつきの瓢  
の瓢をる

葱

清廟寺を經て寺の六何は葱  
木重塔の葱庵より  
寺の戸を知れや種あるは葱

薯蓣

くさねうおを菜汁ふ  
大凡のありしは赤し  
書くてもあるは薯蓣  
子重の薯蓣より

綿

わさうや 毳毼はなまきむ竹の具  
故人のうさぎ

冬瓜

冬瓜や 互りしはけり  
悼仙風

芋

芋向りしは芋まきし  
西行五



虫 蚕

いそあし女ありなまら歌よま  
ねら竊くし虫ハ月下の葉を穿つ  
多るはてし宵やうくくし世のこま  
しつこや強ゆる聲のすくくも  
床より来り舞よ入やきりくれ  
物あくも習よむきりくす  
白髪ぬくまらしらの下やまらん  
まじりしや釘しうけし蚕  
加賀の小松やいふ太田の神社の宮  
おどろくし実を産み菊しうき甲

意了  
晴玲

葉虫

同じ寝のきれありをきりくす  
まのあしうらにれくおどろく  
ひそんや乳甲のト乃やきりくも  
猪の床より入やきりくく  
海士の家ハ小艇くすまらば  
晴玲やどくつきりくし  
子の飛り住居のや木んのかげ  
なまらしれ友まらの方へはる  
このむしりのきりくすよまよそ  
田庄酒家



鶉

柵の木こころうろく啼ふもはのこころ  
鷹の目いし今やとれぬやとらうろく

田中の法花さうらうおや

鷹

川あやや平稻くくくの鷹のこころ  
むき一羽や一寸何のな——うのこ  
ひれうろく牝鷹もよや牝鷹お

を良くと

いと啼ふ鷹や——よのこ

名ふい鷹のこころ

ハ朝

ハ朝やそのこ——またその鷹

秋

曲のまの歌おと

乳麩の下たきこまるとをせしん

六曲六の船の二人よるをはなを

訪まそ——あつのお言はさく

秋の暮

いふまをこつらおひみや秋のそれ

雪の旅それらつてはな——秋の暮

魚菜ま——具進もくや秋の暮

あまのそれ男は泣ぬらぬれはこ

死しせぬ旅床の果よあまのそれ

本因こ



源川の庵

棹郎の瓦葺りさき——林の千札  
り建枝りし鴉のとさうりたり林の雪  
そ竹白痴像

こころし向ふ我いさむよ秋のとき  
所思

三日月  
暮水

はつきやりく人を——にあまの秋を  
あまの雪あかりさうりたり中——柱  
但あゆむやそ友たてりおの  
三日月や船形の夕つ白むしん

三日月やそやふよきさうりたる子の露  
大を根成院より鳴るさうり  
何るの月見まじりも似たりこの月

尚葉初七日詣り

下弦

見——やその七日ハ葉のこの日此月  
二十日過出るや名残この日乃月  
い——あふは採きさうり舟の中よ一おを  
あ——の虫のさうりいをさうり出して  
明けや二十七日おのこの日の月  
武の虎も来時に書を先き——政を



名月

照をき致ひし先とんたあり

名月のあふや五十一ヶ條  
重くと名月の夜や茶白山

敷板板泊

名月や小園のよりきあたま

名月ましくらあそむる深田の月

魚影

夏うすや名月あつた涼りれ

名月や池水うらうらふ七小町

名月や児達をうらを乃椽

名月や鶴雁たうききこて下

名月や月れを望み架のくけわり

名月や我ふりしをる門徒坊

深川

名月やつらききあふりら

伊賀山中一より二句

名月のつたりもかきこて強まふけ

名月より蕙のきりや田のそりり

名月や池をぬらうてしよひまら

名月や西よか回よあふひら



等哉... 尋あひて

名月の入ふおん人... 尋せし

最仲さきと

今月

三井寺の門た... や々の月

本を伐つて... やけの月

月見

月をうけや... 宵月夜

空をうけ... 月見りれ

空以とく... 月見り

庶崎本寺

ちり... 月見り

田の家

時の子や... 月をり

流の橋を... 月をり

ゆしの橋も... 月をり

朝むつや... 月をり

月をり... 月をり

古寺観月

月をり... 月をり

月見眺あり眺す

未... 友を今よむの月夜の夜



十六夜

いさよふしとすく史料の都く那

打出の演目し

十六夜や海を煮るるこの宵の園

望月十六夜

狭めく月を——入よ浮り重

中もくもあそいさよふ月の雪

十六夜はつらつら書めりめり

月を傳方をまひ杜きを傳てやを

こころとまれとつんえを——夜もいで

傳てまあり月傳ふりちあら茶歌

月

月を去る人こみくつらせ旅の名

ろくろ男をさすあつらひの月

頼ハその下てしひめりの月

実や月 弓をちち子 金の角を

すくめりやい戸をさすれを山の

せのちやりの月をさすれを山の

約の舞もさすれをさすれを山の

ちんちんちん 殺すくつるをさすれを

こまのりの夜をさすれをさすれを

るろく 旅て跡をさすれをさすれを



神護山

三十一日月の  
川舟やよみ茶よみ酒よみ月夜  
古物管々古実を語り

月やその祇の木乃のり下西

鹿鳴よて

白アリ——梢を雨衣をらあらし

田家

竿の葉や月結里と乃焼きみ  
あの中よ舟陰をくし宿の月

姨捨山

おりのけや姨割り泣月の子

善光寺

月うらや四つ四宗を直ひら

湯乃庵

月——名をほくもひこや、もの神

燧山

我沖の二孫覚の山々月や

三秋二季つららの湊くし月をを

と重たの神は詣おひその古例をす



月清し遊りのそとに砂の上

涼

月のところ雨より角力えなううたり  
仲秋の夜政賢よとやういぬあるの  
物清まほ海より鐘のそとに竹を  
園の草のあををへて君をを物と就既  
下きかたていあけつは後ををとすそ  
月いつこ鐘のそとに海乃夜  
斜嶺亭  
戸をひしけい西よあ伊吹と云花

見ようい草もすい只孤山のほあり  
そのやうに月もたのり伊吹山  
伊勢國又まよもあられゆるは  
男のこころ物とすあやふんを丸  
旅の心を安く帰るの日向のあは  
を切て座をすけらせ心をは  
月をひよめあつる乃を所世舞  
悼を家と云は平  
そとに草のあををへて君をを物と就既  
下きかたていあけつは後ををとすそ  
月いつこ鐘のそとに海乃夜



三つありて初會

月代や膝うしをむ置首の石

消る

水あかりたるくし藤も夜や暁の月

葉の尾とすけいやは名をいふもせり

こゝろよしきものよきあしなるけしこよ

山に信々の信を尋て西川のよき信を

よし山も葉よのせりいしりいあ信を

よかとすまき坊ありしりいあ信を

葉の尾り月やそのやあしり坊

松窓をね

丸な夜起りり月の七つこの非

柱に杉尾松尾の信を別位ひるま

成水とあしきとを信に夕月のよき

よきと首をさるゑと以裁り

もせび葉をねりしりいあ信の月

深川の末五本松とよきありしりい

川上やしらの川下や月の友

志願者(ゆき)を生れて東野をねり

八月のあしり批り四阿り非



兼せ尾まで

今よむ誰より望の月十六里

暁いふり秋月下送也

月よむむや秋怖るる児の性

そは秋のうらみ

秋七ふらふらうらうら雨うら海うら

山さき一このまこやぬる月

林やまらかりむいつまきむこら

織立や有るう起うらうらうら

を口語を遣う侍は以り望の空をま

約 砧

あつたりのふらふらのよのきねとていれて

剥きさるる方よそきねこのひまふ

よー 砧のうらみ

まぬおたてのれはきうせよや切あ

高のほにうしふ斗は初くきねん

猿ひまのきねの小袖を砧う那

うらみー何うの像

むら雨を脊巾ふれかきし葉切砧

遊女の畫漢

枝のうのりうらうらうらうらうら

葉 堀

葉 葉



鷹赤紅

茅

馬桑

栗

若葉花

まらりこのうらぬあまのをこま汁

くまのうや鷹の赤う時於赤

どくくうま高うらうかふるあふるあ

馬桑や軒端の秋のうらうちへ

杉の竹葉軒と云尾をらあひて

栗秤ふすらうらあひあひの尾

あまの身あまのあまの影もを架ん

よきあやや花よらうらあ脊戸のあひ

伊勢の汁提り山家を訪せし

まはあすい花うらあひあひ山路うれ

初茸

松茸

茸指

早稻

秋刈

落穂

五月の地は松茸のあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

松茸のあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

茸指のあまのあまのあまのあまのあま

かた乃園うら

早稻のあまのあまのあまのあまのあま

秋刈のあまのあまのあまのあまのあま

落穂のあまのあまのあまのあまのあま



穂菴 松をわら茶の木こけげやぶとら  
渡鳥 目うららるるやまけのこけらる  
四十雀 志の石乃ありともーとて四十と

鷹 病存のおさるる 落て松蔭に  
鮭 鮭るのこけらるる 舟

秋 山中十景 歌る 激漁火  
紅葉 是れすこ水生木やわりとらるる  
仲秋の月に更村の重映まきしめ

後の月 木々の瘦もまきこをぬらぬ後の月  
石山より 詣るるさ

名残月 檜樹のまき六月の名残りれ  
住りのわらまき

升の市 外へきて分別のなる月をんか  
内をんかをききしめあまのまき  
以ねとけり

御守宮 昔より一皆抑あひねはまき



母の白髪を想ふ

秋の霜

まうとくハ消し涙もあつた秋の霜

重陽

菊

雪乃下りきこや朽木も

秋を越して城もなまらやきこふ

津波のこゝろすゝ葉をよみすまのふ

龍山の宮をひくまふはてはの葉は

致すれや粗吐たむれとすん程も

四季詠をよむやるしん事を

いそまひのいつきか今朝のこゝろ

左柳をよむ

まをよむけ九りしちり一石のき

菊尾乃雨

花あふる菊尾ののちり水もあと

川海の深つるひくか物事の浦

涌は流す中人の白髪ハ枯葉三玄の

手一あらずも美海よりまむをれ

皮肉うらむ筋骨も通る中中

備は顔とをよむるらん彼の枕凍も

舟をよむるも草堂の菊の枝折れん



山巾一や葉ハたをさく一河のふらひ

木田三反

ほふや月ときくさく一田三反

如り亭

疲るうらうらうぬま葉のほふと成  
まくのつゆをさくひらくハぬさくぬ

田家三反

秋こきの焼くぬさく一まくの花

岸田の伝へ 木段浮舟の足さくは折れ  
ふらうらう葉をさくほをさくをまける

那葉ハ秋の中葉を繪ハまはれハ  
蝶をさくぬを吸すく乃おすれハ

九月たるしおハ持を接すれハ  
そのう戸や日とれハさくぬの酒  
見とさくはあはれや理かのはのさく

成水三反

影初や葉のさくハさくさく高申

八所堀三反

まくのさくさくやる屋の石は百  
古くさくさくさく



琴の相や古もの店乃皆石のき  
園めりさうき

白菊の園より立てて刀をさす  
赤良のまき

おくのまきや赤良のまきかまゆき  
菊のまきや赤良のまきかまゆき  
まきのまき

菊のまきかまゆき  
まきのまきかまゆき  
まきのまきかまゆき

菊花讚

おくのまきかまゆき

元禄辛卯初冬九日赤良菊園に遊

重陽のまきを神と月のかまゆき

まきのまきかまゆき

重陽のまきを神と月のかまゆき

まきのまきかまゆき

まきのまきかまゆき

まきのまきかまゆき

まきのまきかまゆき

紅葉



出水別荘

木の實  
核の實  
椽  
枿

籠りたる木の實をば、実拾まや  
核のこころ。椽もこのおまや、  
木のこころ。世の人のあま、  
枿や伊勢の白子の店を、

柿

田位、  
菊翁と柿と、  
志の柿や一口を、  
望白、  
祖父と、  
片断、

行秋

暮秋

里より、  
行秋や、  
蛤の、  
行秋の、  
中、  
清水の、  
おん、  
懐老社、  
ゆ、



秋雜

月夕のまをいぬれつるれと清庵の秋  
雨のつやせりの秋を 堺 町  
後赤の秋をのあつたをさるる  
深川の底を旅まきて

秋十とてあてて江戸をさるる郷

鹿鳴神前

よの松乃 亥生せし 代や神の秋

田家

かりけし 田面の朝や里の秋  
留別

道にゆくおろしう 采の木の乃 秋  
そとくま 秋よ 聖寺の 外に 鐘  
あまを 庵を いたるを 礼す

秋涼 一とて ちり ちり ちり ちり ちり ちり

小松のつよふら

七の 一とて ちり ちり ちり ちり ちり ちり

種のはな

あつた ちり ちり ちり ちり ちり ちり

旅 枝や 森 涼 目 ちり ちり ちり ちり



地味もしたくも秋の菜を

小名木は相実興り

秋のまじりりや末ま小松川

車庸亭二首

あきの花をさかぬしはなを

あきしは花をさかぬしはなを

あきしは花をさかぬしはなを

秋のまじりりや末ま小松川

秋のまじりりや末ま小松川

庵しんしんしんしんしんしん

漁好の強し

あきのさかぬしはなを

何れも小松のあき乃柳子

旅懐

あきの秋を何てさかぬしはなを

芝柏子

秋のまじりりや末ま小松川



小春

冬之部

月の鏡少きもくもくを月目四月

初時雨

人の海をくわさるる

まじりたる初の子は我時雨の

まじりたる初の子は我時雨の

宿はうらみくもくもくを月目四月

おとまりあるや旅人

旅人と我名よきもくもくを月目四月

伊賀の山中

けらけらと旅人も小春をくわさるる

冬



時雨

詩六首

此の雨は人にも事も初時  
即ち一社に水も此所の名も  
りもや大の如くむくも  
いつか時を争ひてゆく僧  
空の竹もや一かき小豆飯  
石田権大夫

丁も小碓や降つて小石川

さきの雨は時を争ひて

か平もたまに我を

相葉のゆ 志満

さすくもまうとせ

は海うらまの種

も枕大いし

しるもや舟の帆

船の影も

一尾根も

二葉深垂井宿

少ゆらり

他も木の、危もい



と存するものゝことなり

土々々や田のあらし梅のふもを

浮白輝塚本と家より到る

宿ししと名をあらまきし所

百士を部しし時鳥の大井川

彩葉の出ろやそとましし

山城へ井出のたろししと

こゝろ

人こそししと梅はとむと

世をそとむるものゝことなり

うとまきしものゝことなり

梅つらししと梅はとむと

そとむるものゝことなり

國ししと梅はとむと

あつまきしものゝことなり

梅つらししものゝことなり

竹のあつま

こゝろししと梅はとむと

木枯やあつまきしものゝことなり

三河彩葉の家と梅はとむと

木枯







吟酒堂

池水の碓々いひあはるる由一匹  
若君の物のまじりかぢりもよ  
月も一るもよまじりもよ

飛皮津や田中一のやもみこり

控七いふ

と宿を去て去て去て田中  
心をききいふ人あり家僕何  
く水木のいふ身をききい  
心をききいふその捺ぬり

煙用

功をあはるる陶侃おぬをきき  
謀やまはるる人をききい  
そのハききいふあはるる下位  
在るも上智の人ありききい  
織肝いふいふをききい  
その善をききいふ人

先祝へ梅をききいふのいふ

子川いふお

朽も小伊吹をききいふや冬  
煙ひききいふや友表り  
誓の表



支梁こゆま

口切  
沖の守  
口まきうふ堺の庭ろまろー丸  
つるまの百ろあはる神の意系

お月のをめ武守り列

神の旅  
去溝  
都出ろ神え旅床の敷の乳  
えむい溝砲賣ふ袴急せまろ

所命溝  
菊宿改まろつろーろー所命溝

消と

はあ海や油のやまをほ五井

冬枯

あゆみ社や世ハ一ろろー凡の意  
みろせの穢ろろろろろろろろ

月の海とす入ろろろ無寺ろ旅の  
心をほ

教を系

ろろろ渡や深ろろろろろろ  
当ろろの下田ろ地をろろろろ

既ろる筆ろろろろろろろろ  
まかのこもはろ白竹樹ろろろ  
おろろろろろろろろろろろ  
ろのろろろろろろろろろろ



花景

百重のくさきを庭のぢりはひ

夕ぐさの橙花をさるる

宮人よ秋名をちしむせ花葉川

大津を思ふ

木の葉

三尺の山もあらしの木の葉は

九とせの春秋市中に住むは

石を深川の河よりふらふをばあ

は古来名刺の地言ひよして

金たまふそのはり流るるよと云

りし人のかこくつえはつこの

茅のさきまゆらふや

子のたふし葉を木の葉うら山ゆは

耕重のやれ御まき

浪花

ころころはるむやつりうらむ

逢社園二句のり秋

麦詩

麦生てよまきくさか家や島むら

昔昔

刈あふやそのよ終ぬきは乃茎

消息

大根

三十里尾は大根乃語の形

菊の後大根の外きしよな



消息

口上りし素花一りり土大根  
大根引とやあゆみ

秋 煮りし小坊まきや大根引

云席子旅籠もき菜根を啣  
て終日大夫り詠話を

そのくふの大根りきき命水

五郎の及層をきき

花語りしあしおんおきこむまの種

煎田まき

杜若

桔葱

志のよきりし餅ふもやりし

三秋を睡て深川のそを尾り

ゆきれは宿友つ人しよはあり

耳くしいらま回こく人信り

桔尾菜

とろがりもなきや雪のそを尾菜

赤花若古ききりし

冬牡丹

あゆみし子きりよき雪の回もま

掘田柿人しゆき雪の田を

おんまふしきり

水仙

水仙や白き障子のそをうり



寒菊  
枯野  
霜

三河より白香とある者の子ニ入  
一 桃先桃後の名をあらうて  
そのみほひ桃とく白一水仙を  
字もくくや粉練のくる白の端  
旅し病も受はくらのをうけまはる  
美山の雪をあらうて雪をうけまはる  
一 七くふよ吹い草と草の花野水  
りしとくおや一葉一竹の表  
お屋四友子秋はく種念をまはる  
おねを踏く踏破ひをうて送りり

穠田よりおのの花川を朝の舟  
うけて一舟におまの袖や旅のえ  
よまらうや竹水くまらうの志も  
冬杜園二句のころら  
きれもくまらうおの病  
菊の葉の表を見せらうの  
病中  
くまらうのむきくまらうの枕を  
深川古橋末終せし時  
みくまらうの踏櫓の毛



雪

町向をやまをくぐりて松の雪

耕月

雪をまわし上戸の顔やいなを  
あふれ交る帷子雪をふぬけ  
星森政河もいふもみちのゆま  
子はおとむらひ人のいそぎ

志保川少きやせの雪の竹  
笠の緒や咽喉 みる富士の雪  
ゆよのりや羅紗の羽織りたき新  
浪の花とちとや水くさるる

りまの雪杉深き園の葉  
ゆきの竹 笛他んくちあふ  
雪の初ひくちを噛む  
池水くさるる光  
廣うらうら

深川や根の雪意雪うら

耕月

市人くさるる雪の  
林園くさるる雪の  
雪の雪の雪の雪



雪とゆきこころは師走の月、  
若根こころ人もあはれし船の雪  
旅人をかかす

雪をこころをこころのあしは  
さし山自雲積

庭掃て雪をみわすも第一丸  
閑な歳あはれよく

酒のあはれもも麻も丸ねものさ  
心海深業にこころをこころ

こころをこころをこころのあし

越田雨徳友

磨たの月を鏡も清くゆきの花  
信深波をこころ

雪をこころや種屋の雪の州のこ  
おのこころの誰人かあし世をこころ

せしむるも老の浪志留の雪ふく  
ゆきありて大津松本あし月

ゆき表たの海り雪をこころをこころ  
雪出りて雪をこころをこころ

ゆきの尾のちゆきや志留の雪



湖水眺望

比良三上より望むに  
大宮やはめとひびく住の敷の家  
日影にまじり鶴も雪のあはれと氣

小町の畫景

雪さや雪さくぬるまのいと笠  
雪の尾は土あま

木杖のあはれと拭ふやよらの雪  
雪のまじり果たむ住居の南  
竹の横

雪見

たもしてハ雪待竹のりもさうれ  
抱息ハ雪一吳己ハ雪をさるあはれ  
雪のまじり雪をさるあはれ  
越へるゆへ

二人より一雪ハハ雪をさるあはれ  
いとこらハ雪をさるあはれ  
雪長何ハハ雪をさるあはれ  
雪をさるあはれ  
我雪のいとこらハ雪をさるあはれ  
ゆへ雪をさるあはれ



雪丸

軒をこく桂陰を好む人  
すけりこころ成らあはれ  
訪ふ

君火をこけよまをたれをこけ丸

深川をたのむ

氷

擗の聲浪をたけ 腸沙の波

茅草をたれ

氷若く偃臥の咽たるる

あつた碓氷

まことけりやるそこの影法師

霰

花系に趙南の心をいづる山家集  
の影法師

一衣もこころをたれ  
瓶もたれ氷の二珠をたれ  
いそ子信をたれあはれ  
ふ山の石をたれあはれ

自畫自讃

いらぬまをたれあはれの檜

膝ふのそをたれあはれ

雪やよあはれの氷魚をたれあはれ



与或人

おしほらぬ宿や物まきる書あり

おほいさうき

琵琶りの松や三弦の拍と表

再首首尾を告げし

あしほすやは方ハ、その古柏

いさし立鷹引、まゆあしは

新水う琵琶きく軒の表あり

比下の茶店まき

松葉を林火して拭あつたさう

き

城人か吉田の碑まき

きじりおとさう旅之寐るなをき

え和和尚より海をたまりし

えいしよちあつた

水宮と疎入りのさる跡の南

綿子や窓し入りのけいさき

塩鯛の巻ときもきし、魚の店

仙代父の道業

袖のいりよとれし、濃菊

葱白と洗たし、さむさの那



山眠  
火燧

園燈雲  
火鉢  
火桶

こらのとく名ふのこち猫山

山を猫眠もいそや雪のひる  
きりくまはれきよ啼こる  
住つぬ旅のこころや雪さく  
祝このむ志長の法師こころ  
五つ六つ茶の子をきふぬ  
深きやそも深き火をさる  
あつこのの土すうおこる  
古き代をのひそ  
高の後押しつる火桶の所

炭

埋火

頭巾

小燈炭や子理ふ人のなせり  
白まきやの北浦鳴り表乃  
消すまふ新しき雪の  
ゆきすまふ新しき雪の  
埋火をきゆや波の音さる

曲翠旅籠

埋火や石まきを窓の  
ゆきすまふ新しき雪の  
推名やきりぬるの  
深川いその中



紙衣

米買ふべきの袋やまけ紙中  
取中忌の類や紙を丸  
りこころもおねや置いと押して  
あつてしちかんとまる紙衣丸

李下り妻の悼

蒲團

ふきふきと蒲團や言まはれぬ

畫譜

念

たのむそよ床酒なき紙の残る方

後押念は鉢敷を結して

鉢敷

古唄、懐小めりとのけらうと先

霰酒

乾鮭

以豚

物まきる者か何れはちと先

子代をす天のうんつるあはれ酒

うづ鮭や何れ一取そ毛座人

あはれもなまきふらさし汁

何れ汁や鯛もあるよ甘き刺

あはれもなまきふらさし汁

あはれもなまきふらさし汁

見守のうきやにさむやふと汁

桑名へ遊ぐ紙面へ列る

あまふ事ぬ何れつる魚七里妻



生鳥籠

生きたまはひらふよふ羽さちまかこり乳  
尾張の國籠二回くまきりりりこり  
くく仲走の海はくしとくし舟きり  
出り

鴨

海苔煮かもの煮くぬのふらふら  
籠あききり

子鳥

山鳥よ我わのしと藤く青まき  
籠もつつこくくぬきりりりりり  
一ひきのまきりりりりり川ちりり  
福きりり 松月の里 鳴ききり

鷹

夢のつらき笠寺ハ 二方の陣日  
星崎の園をかみよもや 啼ききり  
杜國をかみりりりりりりりり  
たうひらつたつてりりりりりりり  
杜國かききりりりりりりりりり  
鷹のきりりりりりりりりりりり

師走

夢すくえいりりりりりりりりりり  
月もく仲走ハ子語り床見えん  
十二月の一日きりり  
松林すくきりりりりりりりりりり



寒

五百丸へえ服の祝よりして  
春やまきまの暮るる人とは所を  
何よははあまの市ふりし物  
さる水より仰る色の海のさつかり  
うらむ舞も空也の疲れさうの中  
月花の過り鏡ましくさるる入  
るさるるさるるの田面やさうの雨  
は甲敷はひもさうのさうのさうの  
のさるるさるるさるるさるるさるる  
はさるるさるるさるるさるるさるる

早候

つ水の文うさるるさるる  
つ水の文うさるるさるる  
つ水の文うさるるさるる  
つ水の文うさるるさるる

探梅

香を探る梅も花も了軒端ハ  
うちさるるさるるさるるさるる

節季候

素雪さるるさるる  
若きさるるさるるの笑ふ出さるる  
梅押し説きさるる



煤掃

まき掃や暮らり者の言新  
旅寐して刀や浮世のまき掃

旅行

す、掃、ハ、杉の木の子は、嵐の車  
ハ脚の五黒一黒難波の跡一置  
まき手睡て海通のおくまを  
是やまの煤う深しぬ古盒子  
まき掃ハおのゝ棚つる大ユのれ  
多助も三十日道一まきの言  
まきくつて煤を研のまき掃を

餅搗

餅花

名所の説の中

祓配  
古唐  
年忘

まきの言やまき掃一まき掃一まきの言  
松崎や雪の志し地のまき掃  
うまきとまき掃一人やまき掃  
まき掃を北三人寄つて喧嘩の車  
海の旅並列南系桃丸具り  
まきの神を友りまき掃一まき掃  
まき掃の消すハ月来東  
都をまき掃つてまき掃  
まき掃を掃つて







のあましよふらびつしよまてはるも  
見捨るるそし初冬の雪のうら  
しうもはより雪のうらまのあまを  
経て師老の末伊湯の山中より  
来る父母のふらふらせむも  
あしよふらびつしよまてはるも  
あしよふらびつしよまてはるも  
あしよふらびつしよまてはるも

系列の店をよるるせのそれ

画譜

行年

ゆくもやぬ親の小松うり  
りすや菜うらまの梅の花

大年の換盗うらまのそ

冬雜

梅干ふ通ふ雪のあまをきあり  
石くはる水志白のやみん  
面白く雪の友や少中菜うら  
まのそ



大通庵まはる園在士芳名をす  
りきりし—まきふまきこくんと紙  
契て終ふまきをせし初冬一  
程の雪と消ぬるふまきやひや  
わたりふあふたりといふをすそ  
まきまきまきや枯木の枝の長  
或庵りし  
冬庭や月もいとある 雪の吟  
三河國風草さるる 詠ふその  
邊より何の病昔りて 蕪乃

三季

高よ一程のまきとて  
物忌ひらうしりし出て旅探るれ  
ありあつた杖つき坂をたぬるか  
朝よまき誰か踏むそ片ころり  
酒飲居る人の繪  
月花もたきて酒のむひりれ  
貞徳宗鑑も或る画像  
三翁の風雅の天工たけり心  
匠をよあまふり傳ふまき遊べ  
その詠は能く故あつたまき



月夜のそらやまのまのま連

影の花け

は柜のむら— 桂、梅の木

瓢の銘あり略して

そのひらり瓢いりき我世のれ

布袋の畫譜

ものほやふらの中の月と花

城の新瀉うそ

海は降— 回やこひはうきさ者

境り— いさこらつてん都— 号

張笠の説

サ— 降もきしふ宗祇のす水

骨染や— のふんるすう城のう

う— 心ぬ返取よぬん袂— 丸



我々をさるるやうに人の秋のふれ  
 少ゆにさう柳二三片見てもせたり  
 ちつく今月くちやうく福あま  
 點禮うき友人あつたまに  
 山菜もさうし服をさす言也  
 うさひの立只刀や柳のれ  
 角まをて流川にや船のり  
 片の花をさうてさきかた  
 少るる清水うたやまの奥

蒼乳  
 菱池  
 沙臨  
 物場  
 斗圃  
 孤米  
 桐雨  
 西月



この人の世の中もなまの屋敷に  
 水も丸麻入さうや花も月  
 あらさうといふ水も言一二月  
 秋三月同ーしちたう夜うー  
 夕山や二日のうーをさう吹  
 その買う二人出てはけさ  
 葉の葉やまともさるるうー  
 せむさうさうさうさうさうさう  
 麦の秋家内さうさうさうさう  
 あら株やまあ水はさうさうの秋

有月 平山 庚年 禾木 隼啄 杜噴 碩布 小圃 大杉 八采

うちの外にさうさうさうさう  
 ようつうさうさうのさうさう  
 のさうさうさうのさうさうさう  
 中さうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさう  
 人さうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさう  
 山さうさうさうさうさうさう

梅室 杉通 太志 茅英 柳絲 南浜 丸起 杉候 芥舎

山塔



さびしうまのトや口あつく疎の貝  
しんじゆの口きらく柳の影  
しんじゆや申すをきくしんじゆ柑子  
しんじゆや疎水とてしんじゆ窓の画  
しんじゆの増えしんじゆあせか  
梅さくやすめりしんじゆ明ぬ木戸  
しんじゆや蕪根をきくしんじゆ鴨ひら  
しんじゆや耳よきしんじゆ望の尻  
号やしんじゆ枝しんじゆ程  
しんじゆや木の馬の雨をきくしんじゆ

岳風  
杜鵑  
丈翠  
燕池  
枝月  
高堂  
杜鵑  
みき  
万籟  
岱年

太くやけめはそあく丈夫なる梅津  
しんじゆはしんじゆしんじゆやしんじゆ  
しんじゆの太くしんじゆをと片  
梅津まてはしんじゆしんじゆ  
しんじゆ入るしんじゆしんじゆ  
あまのしんじゆしんじゆしんじゆ  
おきしんじゆのしんじゆしんじゆ  
大津のしんじゆしんじゆしんじゆ  
しんじゆやしんじゆしんじゆしんじゆ  
しんじゆのおしんじゆしんじゆしんじゆ

法叟  
祇白  
白鷗  
曲阜  
林左  
五嶽  
識兄  
其山  
素屋  
林曹



うつらとたきふるうらふてさのり  
 中へしとねををこもる小春丸  
 水衣やうけのこもる一まらるる杜麩  
 秋風や算うらうらう響ひら  
 水仙や水着うけて萩の外  
 花ももは見えおらぬ里やうらも子波九華  
 しとねんて合点のゆまぬ佛の生母性寸凡  
 燈よむやうら茶のうけの一住居  
 若冲よりや煎茶も一ふらう筑あ回巻  
 茶のふせよももりのさけぬひハ  
 冬岐  
 雪  
 大  
 可  
 響  
 村  
 九  
 華  
 寸  
 凡  
 佛  
 兄  
 筑  
 回  
 巻  
 回  
 巻

まりともをるのひぬや  
 山茶茶や山寺を春のうら木  
 のこねをこま年よりうら木  
 水うけうけうらぬわのこ水  
 きりうらうのあらうて猫の別れ麓摩山骨  
 一つ春や二ツ頃うら梅うら  
 朝の雪はぬもあらうら茶のうら  
 夜も一と二のうらうら茶のうら  
 咲くうらぬもあらうら茶の中  
 うらぬやそののうらうら茶の中  
 冬岐  
 雪  
 大  
 可  
 響  
 村  
 九  
 華  
 寸  
 凡  
 佛  
 兄  
 筑  
 回  
 巻  
 回  
 巻



川尻よ成て危しー 残響の跡 残岳  
 才、あ方と刃ゆる 理うわ亦伊勢常居  
 吹ハセぬやうや 殊ししもの凡 柴人  
 首こ葉よ少のやうーうひん菜 映つ  
 水まけを水もまよなる黒く丸 何波露尔  
 うけハれハ中るのつくる扇この南 太卷  
 青光何も忍ぶぬとよひひかり 風橋  
 ちあをさるるあてもなうらも 糸糸  
 人いっしんをさるるもしく梅忍ぶ 涼枝  
 出るとまや水よ中るや 夏の月 漢波 今也

いさるるやまよまきる 殊のこま 茂推  
 まもまきこまきー 鳴鴨さし小石 法政 半水  
 壁をさるる 藪わりの 遠く 楳火丸 紀伊 用那  
 炭竈や入りの 一々しかり 伊勢 省吾  
 墨様くしんきー 小月の 姓水 亦  
 出りよりふ成して 龍光や 坊牛 淇水  
 月影しんきまきる ちんて 回も さい白  
 り石やつきぬけ 出もよるの ちん 雀史  
 橋付の中りこ 口をさるる ちん 園輝  
 井のまをぬく ちんあうとま 竹 石鼎







うらやまきーこまのぬい  
 りしつ田の水書やまものらひ三河  
 猪のあつちちも山なりぬ蒸棧  
 沖あれつてさしうれる新内水  
 起るけいーうまの治や果子を  
 古んわやまうなるのたより水  
 雪汁もこららましくなる雲の雲  
 ゆうよく時く一尾なり小陸り南達江  
 ち合の七子をまらなるやーたり  
 古まはぬねおまひりは抜りぬ  
 思文  
 卓池  
 水竹  
 塞馬  
 青可  
 波文  
 江  
 且松  
 未老

うら木屋の満海をまーやまき新信徳  
 忘ゆけしこま木う一尾のぬい  
 みのの雲や木の葉の書まこ  
 ひくくのさおハヒとけー牡丹水  
 書のある葉ハうくこしよまの雲  
 捨てハや利まああるとまう水  
 晴まらて水まきまらやまきん  
 一と水かたこま出てある石を介  
 野をぬまらぬは葉のまらーこれ中  
 月の中こまー一列よまらる加賀柳壺  
 主布  
 美人  
 叢  
 樗平  
 白兔  
 鴉醒  
 神甫  
 正祥  
 様翁



降きととあきちりよあきけ  
 ニニりして月のあき登りの年  
 りめあきして一軒の雪山の雪  
 松松の眼先ふきくやるもまだ  
 折ひくく藪のあきききさ  
 起ききくや蚕の棚掛珠  
 おりあきと月のけききり  
 一るや花をまつ口の急るな  
 みるや一のききくや碓さ  
 漢く松提きくくくくく  
 北 西 夏 姫 茶 乙 年 退  
 洋 晴 相 山 帆 良 緒 平

山やその志をうもくめのか  
 うきくく木もあてまよひは  
 うきくく樹ののけききく  
 あききくをいつくぬ心志う  
 七や隣の家の一志きき  
 うきくや一おききく  
 木松もききく入りく  
 うきくくぬききくややの  
 葉はたき月の中やきき  
 市街ふのりききく  
 北 西 夏 姫 茶 乙 年 退  
 洋 晴 相 山 帆 良 緒 平



あやめくふるよまーり家松の漏  
松つるや疎よらむものつゆ中じ  
つららし切をたすもぬ露汁  
底あうーしてのこぬまむさる  
結宵や中の消せー燈もつげん  
子あ月やたろひく水のおと  
あふすうらや煙のすまぬれ  
ト糸やせーこらぬむのま  
水きの立やあーのーのー  
交らんよまら田アひまをり水

卓堂  
英泉  
心阿  
江三  
禾月  
二朝  
善用  
茶油  
精為

燈すくすあやめくふるよま  
燈籠や後戸をささる人のけ  
穂ろらうらなぬる日の照るま  
又海れも見えろるそのまら月  
出なけことおひのまも木下や  
目らるるも然ろつてむやおる  
柿の本もるるろーろる小里ろれ  
まらこ出てさのまをのまら  
横所へまらつてまーの川  
舌すくす小そらうらまら

守三  
南幽  
清氏  
一山  
加菊  
双鱼  
野菜  
一地  
二峰  
涪水



片のぬくもりのききのおゆり  
うめおりの子傳きや屋敷の  
桐の煙のよりけりや福ありま  
お凡をまきくおもやうめの花  
まらうとどのりう花の山うら  
えらぬはよ流つら出さつてきん  
笠籠男の中山をぬけやきし  
啼きももろく人聲も林の中  
とさあして袷着をぬけゆめホ  
はも洗の柳木わくりききなり

湖井 歌秋 新華 奇哉 さら丸 うち重 未足 楓冥 其美

ゆりぬけふ言とまきかな余言  
ゆきさるまふうたふ山けけの  
葉のまの類うつやまおみか上  
岩無木の屋敷ふらう一里塚  
改屋こしよまきけしたこの  
よめやうよる木はうらうら  
毛の川わらやまふ然よまき  
出代さ口もらやおの晩し  
うち水をすけくのまき宿屋  
影よのけらうや夕日のほくら

ゆりぬ 岸高 竹畑 外 嵐 雷石 喜楽 欽哉 養育



こゝの水ついで竹はけりさる  
芍薬の口はさるらふつらさ  
うらゝゝのうらゝゝの堀子残  
伐てうらゝゝのうらゝゝの  
言のうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの

蘭水の  
の持  
巴那  
子也  
四風  
津山  
立宇  
松堂  
安成

故のうらゝゝのうらゝゝの  
花ひらきまもつ何よりも  
あゝやうなうらゝゝのうらゝゝの  
いたゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
よゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの  
うらゝゝのうらゝゝのうらゝゝの

如  
松甫  
板堂  
為周  
高又  
牛  
永保  
金波  
陸車  
松史



秋まろくこころみしわらや垣の内  
松の根のゆきうてをすのまき  
葉のそくそくのゆきあるゆきえんれ  
門松の口のあきすすておほく  
のゆる月梅とあきあきあき  
あきあきやんあきあきあき  
人のほくぬきあきあきあき  
よきよきやあきあきあき  
甲の深の垣うき水すひはのそ下総  
ま柳の葉下あきあきあき

米林 一 方國 就南 一 字十 一 井南

あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき  
あつらふて置くらまきあきあき

山 野 百 什 貞 高 既 来 李 華 士 明 蒲 馬 江 月 桂 乳



三日月はかきくむらさきのいさひら  
まろ林のうらむる北いとしてきぬ  
舞も一口つらんせきののきり  
りのきの親子とてかきく火津ま  
花のふい木もにま年の乳をく  
まもあまのうらうとまきま  
うやつアまし木まのちき住居  
まろとくぬさやまのまお出ぬ内  
まや花のゆふゆけまのまひ  
ま山の物まのまゆるの月う乳

梧成  
ま岐  
う丸  
ま藍  
汶水  
麦人  
玉洲  
乙春放

一ひらまきよまきよまきよ  
栲のまきよまきよまきよまきよ  
相のまきよまきよまきよまきよ  
凡まきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ  
まきのまきよまきよまきよまきよ

比古  
ま物  
ま岸  
まり  
一甫  
岸鐘  
駭馬  
士祥  
大照  
大眠



日あけたりやあしひくくまむ福寿子  
 日たを少して中一このまやいのあり  
 水飾のいつまももある小宮う乳  
 うううーヤ日のあまうううう月の影  
 蓮葉をよん遠くまうけーまをれ水鏡  
 柳をうてままうう類もせきううう  
 花の山を少してまをーのこらう二つ  
 名月やううむく方よ月のおと  
 とよふくううあありううの影  
 子のあふもたまむやうよの花まう

桃 互  
 晁 旭  
 晁 遊  
 園 丸  
 鳳 朗  
 護 物  
 一 具  
 由 按  
 雄 衆  
 風 外

えおやあしくうんゆる人の息  
 文月や子も志故指れ智あいつく  
 ううう然もまふありやるの影  
 ちううまうハハゆあへのちうき柳ハ  
 峯ううまうもなうううのま  
 雪城うううううう月あう乳  
 うううまううやううううう業  
 ううのううううううううの中  
 ううのううううううううの影  
 水あひうううも二百十の影

逸 洞  
 白 華  
 若 竟  
 粗 文  
 活 高  
 惟 孝  
 の 山  
 玩 甫  
 宗 羽  
 現 子



柵の木の下にきりてなるの月  
の星や芒の水の秋のうら  
まらふやふゆきくらのニニ  
降中をうりりおやと月る  
炊きせはる少もかき千秋の  
生うつけをも月よあらし  
つとく人にきりやあはれや秋の  
いふまはりやかきくらの秋  
ひとやらハ物の名跡やまう  
うんひまやうらふとまもふ

第以 南枝 麻衣 丁お 言山 与翠 持儀 枕碓 李郎 清

名目や沙うらあらし草の  
灯のうけをたしとまきり  
まらふ言の扱はくを月よ  
あし浪よきとまきり雨  
田の名やうらつきあらし  
はらふよく海苔もよまきり  
そえたるうらまの旗刀を  
日のまきりしとまきり  
雲の灯のまきりしとまきり  
叢山をうらまきりしとまきり

太良彦 白郎 小柯 山お 伯を 折桂 庵お 荷少 氷孤 助宣



あふふに必あふや 左のち  
城うま里や家毎うめの花  
海の上うまひるをてりて茶  
らや井のうまひるをてりて茶  
風うまひるをてりて茶  
うめまきや茶葉中のうまひる  
燈もまきや茶葉中のうまひる  
志しくもまきや茶葉中のうまひる  
まきまきや月も一晩待やうま  
ひりやまきまきとまきの山

杜有 凡非 在雨 秋會 凡阿 大鵬 素瓏

あふふよく月も出てまき花のう  
新うまひるをてりて茶葉  
桐中のまきまきや茶葉中の  
魂まきまきや茶葉中の  
うのまきまきや茶葉中の  
まきまきや茶葉中の  
畔のまきまきや茶葉中の  
まきまきや茶葉中の  
まきまきや茶葉中の  
まきまきや茶葉中の

洞天 謝堂 山谷 茶静 白起 簾庭 善室 氷水 完哉 雲山



風はけしつとくまはねり  
濱月の吹さくしるしと水  
ゆく年よゆきものつきし柳哉  
ちよふれと別しよは花のさきり  
多しぬらしてりしものうら  
後ひのそし念もなきしを  
橋の下より輝しなりまのる  
うらもつとくさかあはる  
庭をけしつとくまはねり  
中む首しるしとくまはねり

素明  
杉露  
杉井  
古味  
浄友  
樹村  
魯中  
辨是  
栄居  
八百景

のらりとあけしつとくまはねり  
柔風や何と交りしと水は  
月のおよ枕吹通しと水は  
うらもつとくさかあはる  
そらりののらりとあけしつとくまはねり  
おもひのらりとあけしつとくまはねり  
ちよふれと別しよは花のさきり  
多しぬらしてりしものうら  
後ひのそし念もなきしを  
橋の下より輝しなりまのる  
うらもつとくさかあはる  
庭をけしつとくまはねり  
中む首しるしとくまはねり

小汀  
龜野  
清河  
仙居  
善悦  
権薩  
多景  
号受  
千瑞  
里雪



雪も方多く朱の樹も水も松も  
曾やうもまき水も松の志  
くもりは周のひやつく茅の根が  
十ふりうのひのこゝろや、月佳水  
山をこゝろ月や、水の流れ  
耳も木のあゝりまき、時る  
梅さくろ雪つむ中、まわりのゆ  
玉水や、雪、軒、まきのいろ  
く水際も雪を、出たり山の月  
所中や、二日おと水、く、く、く

文輝  
葛堂  
去一  
月佳  
冰佳  
太珉  
巳千  
赤光  
赤黒

まのふり、ま、松、ま、く、く、く  
り、松、や、一、ま、ま、松、松、草  
わ、黄、雨、の、ふ、く、く、く、く、く  
お、く、枝、も、く、の、ま、お、く、や、ゆ、ゆ、ゆ  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く

聴松  
朱彦  
ふえ  
享瑞  
味善  
蓋雨  
四葉古  
五波  
湖山  
百部



おまゝらや花の中しり水の音  
うたよあやうし物も不味ぬつて  
しんせやおのきつるまは森のま  
葉のむやまのこもひのま  
おまの庵とつてむふまのうけ  
えまもすしやま鐘ハもまこしり  
流まこくま成まをまのあせり  
まこせしりまこしりまこしり  
あまのまこしりまこしりまこしり  
まのまこしりまこしりまこしり

二葉  
唯手  
裡郷  
依芝  
由之  
祭文  
臥息  
寛爾  
持林  
柳水

浪の初めつるのまや詐し  
居つたえきまをまのまをま  
そらまき砂のまやままま  
しりらぬまままままま  
白炭のまらまらまらまら  
木表へまらまらまらまら  
まのまままままままま  
まのまままままままま  
まのまままままままま  
秋風や海の面ハ何水

云余  
三託  
南川  
去浦  
青州  
川被  
衣月  
魯心  
南心  
奇三



舟の帆や熟くしき水は月の光  
 出て見れば白の光なるまきの宵  
 月よせしをきあそびるる葎の火  
 りくくともよきるのまきく水の光  
 あそびや柳保まきく又ひくく  
 漁屋の軒の水まきくつて時をハ  
 啼ききりの人は別しる桂の丸  
 軒先のあやうつまよ日本橋  
 りり坊の上よりのある太蘭水  
 のあそび鴨のうらした船りな

水久 羽一 巨沙 五精 葛出 山史 葉葉 草成 叩月 烏糞

船もや別て巻かきくくのこ  
 田の水のこころもまきくし後の月  
 ひくく出きるる入り月言中  
 本まきくの浪もくるとあそび  
 人こもりあそびつゆまきく  
 人のりけをきくよや枯船原  
 言のやうきくしつて一森入  
 中よりやうきくし語のまきく  
 雨く水を降子はあそび

舟丸 太乙 見外 栞笠 又々 米山 弄化 英丸 叩月 芝耕







二葉の層々一枝うそく標板片  
蕨舟よの啼て舟のあゝ独的  
りちうあ舟の舟をの 水盤片  
ううきも万はあやめ即ま  
とうふて二面をひびや若わら  
あうのう雨うのさけ木の葉片  
碧翠の二葉秋梅うやん  
出うそしたん石の喚ふ鏡ん  
書よまのひん少利む演辺をか  
吹つたたふうよのこや幹の雪

志友 木酒 左介 痰水 杉外 左魯 乙調 栄鳩 末年

半まればなはらりぬ日る楓  
見てさうあう勢をきくけ種片  
常の舟と結ひ一尾よまのる  
はらうた細うりの一書ん  
うめおるやうらまはれ小きさ  
ううつまうや若の枯うめ  
中あ栄やたう枝よを池と丘  
古木もあやう細うあ柳片  
春う春う一白はあまこもあの子

若あ里 青加 乙株 乃川 栄助 羽人 末臨 水片 演吉



山水はまむをさるゝやまゝのま  
 凡のあゝやとほまのりり乳  
 な水さきになくてもきし鹿も  
 きた樹のまゝあて君の枯野水  
 三保十五甲辰み

松竹

追加

味もも溜水あしき帝のりら  
 頼のりそくまきくまうのるほみハ  
 魚好むむらえまけ花のやと  
 鳴いたくハ木入てりま  
 そくく小まつめくくも中燃れ  
 森くまきまおまのりそく樹の中  
 枯くそまもたさの地際ハ  
 虫さうおよ入門のりそくまふりか

卦就  
 量見  
 大彦  
 境枝  
 雪風  
 淇君  
 文龜  
 哺水



松の葉もつらよ引きくらはは汁  
ころけりりありせきり東の嶺  
秋ころや大樹のけけ成左のむ家  
日のきいて氷きハ吹やまの風  
浪高のききよまきくはすくも  
あまもや東くくのもいふ敷  
野のまや海程くくくま外  
やまの木のまのけくくくく  
正月や掃ハなん不もあはゆる  
まきとまきあはゆる水ぬ垣の中

石膽  
石  
素因  
條力  
要五  
白桂  
外  
良台  
美備

吹あけをききまきくくも  
日ハ西くちくくくくく  
とくくくくくくくくく  
葉ハまきくくくくくく  
くくくくくくくくく  
水底くくくくくくく  
洋の根もあはゆる  
竹の火新もききくく  
のくく飯のひくく出くく

多少  
米海  
如丸  
烏谷  
是流  
波同  
素り  
荷了  
田未  
ふ墨



くわくわくもなきおのり  
一夜はくさかしく河原よ  
君ちりくく戸も明らき  
中の糸流川よりも城よ  
くわくわくよおのり  
居直りくく上生れゆく  
まことくわくわくおのり  
垣外やひくさかしく

水  
梁  
子  
山  
糸  
茅  
英

類題芭蕉句集跋

吾友松竹慕系次芭蕉翁之  
遺句得一千二百餘首分  
季類題類題為一集答曰類  
題芭蕉句集刻成見惠一

芭蕉句集



部且徵ス隻ニ之ヲ夫芭蕉翁者  
俳諧壇上之廣大教主而  
松竹者當今一位俳諧善  
薩也斯人而舉斯盛事  
是豈待余贊張哉レ然已ク

則請製蕉翁頌一闋酬之  
他日使名畫師造翁之畫  
像ヲ余董テ手ヲ重テ題シ其上燈ノ頌  
曰天ノ生ス物ヲ裁テ者ハ培ス惟シ昔  
芭蕉樹ノ翁ノ風聲雨聲

芭蕉樹翁



琅球夏唱于唱喝誘後策  
冥霧海表關鴻濛不持寸  
鐵降羣魔攘邪歸以正  
振宗風打邑行脚可謂勤  
雪中蹇衛雨中蓬幾緬

草鞋一枝杖擔風握月西  
復東到處逢場人送迎  
竟使名號試岳崇噫嘻  
芭蕉異凡草霜葉雖摧  
壽至家百五十年如一日



樹碑祀祠禮盛隆辨  
為淮十詩家例當鑄黃  
金書以爲松什曰善遂  
以爲跋松什號米薛扇  
與余異門同調猶如素堂

與蕉翁時甲辰十月十二  
日也

雲山老人澤維識  
袞堂嚴秋原肇書

卷之五

四



三都 發行 書肆

同本 英石町十軒 大助板	同茅町二丁目 伊八	同壹町目 須原屋茂兵衛	同日本橋通二町目 山城屋佐兵衛	江戶 岡田屋嘉七	大坂 河内屋喜兵衛	京都 出雲寺文次郎
--------------------	--------------	----------------	--------------------	-------------	--------------	--------------

三都



角田藏書

角田藏書

角田藏書



